

# 「千葉氏を語る」だより

## 語る「だより」

令和3年度  
第12号  
発行・編集  
千葉氏を語る会事務局  
発行日  
令和3年9月1日

### 第七回 総会開催

千葉氏を語る会の第七回総会及び記念講演が令和三年六月五日(土)に千葉市蘇我コミュニティセンターにて開催されました。

定刻、司会者より本日出席者三十一名、委任状による出席者三十名、計六十一名、会員総数七十四名の過半数に達しており規約第八条により会議は成立との報告があり開会を宣言した。

### 向後会長の挨拶

千葉市は今年市制一〇〇年を迎え記念誌の発行、第三回千葉氏サミットなど、記念行事を進めており又、五年後の二〇二六年には千葉氏による開府九〇〇年となり、この節目に当たり

源頼朝を支えて鎌倉を開きその筆頭御家人として幕府の運営に寄与し多くの功績を残し、郷土の誇りである千葉氏を広く市民に知って貰いたいと願っている。

私の関係する先で作成した小学生中心にした子供たち向けに紙芝居「千葉常胤物語」が小学校での公演で好評を得ており、この千葉氏を語る会でも活動の一貫として取り上げると聞き心強く思っている。千葉市は街造りに当たり四つのアイデンティの一つに千葉氏を取り上げている。郷土が誇る先人の活躍の歴史を市民の間に浸透させてゆきたい。

### 来賓 挨拶

千葉市教育委員会文化財課  
課長佐久間仁英様

千葉市立郷土博物館

館長天野良介様

本会顧問 前千葉市議会議員

小川智之様

### 議事に入りにつき

本会副会長鷺見隆仁を議長に選出

### 議事

#### ・報告議案

第一号議案令和二年度事業報告

第二号議案令和二年度決算報告

第三号議案令和二年度監査報告

第一号〜第三号議案につき各関係役員より報告あり。

同報告議案は一括し原案通り承認された。

#### ・協議議案

第一号議案

第二号議案

令和三年度事業計画案

令和三年度収支予算案

第一号、二号協議案につき関係役員より説明あり。

同協議案は一括し原案通り成立した。

#### ・報告事項

役員、顧問に付き現状報告有り

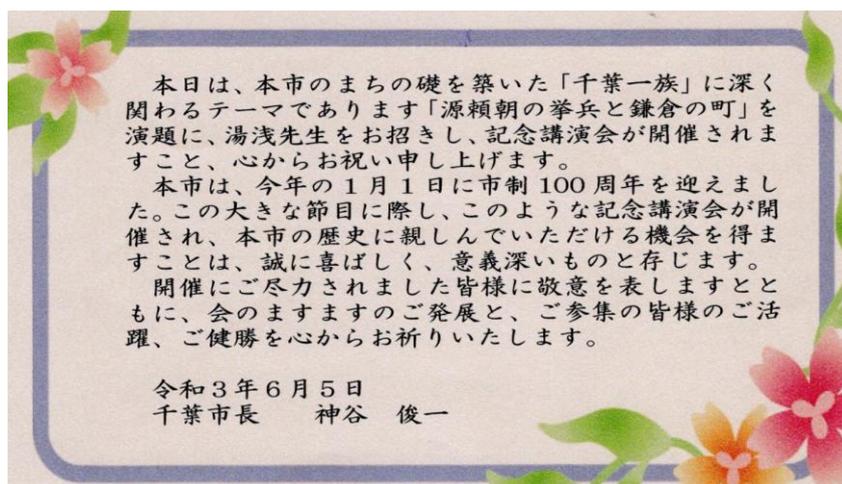
役員一名死去により退任した。

役員一名死去により退任した。

以上で全ての本総会提出議案は承認され、議長は総会の終了を宣言した。

読んで、専修大学湯浅治久氏をお招きし「源頼朝政権の成立と千葉氏」と題する記念講演に移った。

講演に入る前に千葉市長神谷俊一様からのメッセージを披露いたしました。



源頼朝政権の成立と千葉氏

湯浅治久

一

治承四年(一一八〇)八月、伊豆に挙兵した源頼朝は、石橋山の合戦で大庭景親らに敗れ真鶴半島から海路で房総に逃れます。そこで両総平氏の雄千葉常胤・上総介広常らに邂逅し勢力を盛り返し、鎌倉へ入り幕府開創のきっかけをつかみます。

頼朝を支えた常胤らの活躍は幕府の史書『吾妻鏡』の冒頭、印象的な話です。この講演では房総における頼朝と常胤らの動向を追い、東国武士の群像と武家の棟梁がいかに結びつき、鎌倉幕府の開創という「事件」となるのかを追ってみます。またあわせて鎌倉幕府とは何だったのかについて考えてみました。

二

そもそも頼朝の挙兵は雌伏二〇年、武家の貴種が満を持して立ち上がったものとみられがちですが、それは結果からみれば

付け論です。頼朝の挙兵は平家方に追い詰められて、やむにやまれず行ったもので、しかも木曾義仲や甲斐源氏など、多くの競合者のなかの一人にすぎなかったようです。同様に、武家の棟梁のもとに結集する東国の武士団も、各地で競合者との争いを抱えているのが現実でした。彼らのこの時点での結び付き、いわゆる主従の関係もその時その時のドライな思惑によるものとする方が事実に近いようです。

千葉常胤の場合も、下総国内に千田親政という外来の巨大勢力があり、また上総介広常は両総平氏の本来の族長として常胤を圧迫する立場にありました。

常胤は、頼朝に積極的に従うことで、千田親政を討ち、また広常ものちに暗殺され頼朝政権からは結果的に排除されます。

こうして千葉氏は鎌倉時代以降の発展の基礎を、頼朝の挙兵に参加することで得ることになったわけです。頼朝も常胤も、リアルな政治的選択を生き、勝ち残った者だったわけです。

当時の東国武士たちは、多かれ少なかれこうした矛盾を地域に抱え、頼朝政権に参加することで敵を排除した人々だったことが近年わかってきています。

三

頼朝の房総計略については、『吾妻鏡』のほか複数の史料が描いていますが、一致していません。ここでは千葉妙見社に伝来した平家物語の異本『源平闘諍録』、などを手掛かりにして合理性のある経路を推定できるので、安房から上総・下総へ国府を拠点として進む頼朝軍の行軍を明らかにしました。その結果、九月下旬には下総国府(府中)に入りますが、そこで軍勢は長らく逗留することになります。

下総国府からは、太日川、隅田川を渡河して武蔵に入るのですが、武蔵の雄族秩父平氏の去就が明らかでなく、眼前の江戸氏の暗殺あるいは懐柔を頼朝が工作していたことが逗留の理由であったことが明らかとなります。

十月に入り、頼朝軍は武蔵から相模へと抜け、両国の武士団

の去就を決定すべく相模国府で論功行賞を行います。これこそ本来は朝廷と国衙の役割で頼朝軍は敵方所領の没収と本領の安堵を梃子として勢力を拡大しやがて鎌倉に入るわけです。

四

さて、千葉常胤と東国武士の動向にスポットをあて源頼朝の挙兵を見てきたわけですが、この段階の頼朝政権は、いわば南関東に基盤を置く反乱軍、軍事政権であったことを本質としています。

この後、寿永二年(一一八三)の平家の都落ち、文治一年(一一八五)の平家滅亡、そして同五年(一一九〇)の奥州合戦を経て、頼朝の政権は朝廷から権限を得て、政府あるいは国家の様相を呈してゆきます。鎌倉幕府という頼朝政権の性格については、これを独立の東国国家とするか、あるいは朝廷の軍事を専門とする権門とするかなど、諸説あります。それに従い幕府の「成立」時期も五つほどの説にわかれているのが現状ですが、治承四年の軍事政権としての出発に近年は注目が集まっています。

東国武士と頼朝の政権の出発点に、千葉常胤や房総の諸勢力の去就が決定的に重要な要素であることをご理解いただきたく思った次第です。

## 会員寄稿

### 徒然両総三国歴史散歩

(会員) 上山貞蔵

お役にも立てない我が身のもどかしさで申し訳ないと正直自責の念の日々である。

ところで流浪の旅路三十八年間(経歴概略一末記)の中で私の人生に特に大きく強烈な影響をうけたのが「安房郡(安房の国)二度四年間の勤務」であるので当時の「私の放浪五行日記」で回顧しながら順不同であるが、失礼を承知で思うがまま記してみたい。

文中関係する大兄諸氏がおられたら伏してご容赦お許しを願います。

第一 房総半島の思い出

一 歴史観の目覚め

昭和三十四年から牛歩三十八年主に千葉県下を中心に職場の転勤により様々な人との出会いに感謝し、小過はありながらも平成十年三月肩を叩かれ定年退職、現在は千葉市内にて家族や友人に支えられ、お蔭様で健康であることに感謝しつつ、愚妻と共に二か月ごとの「十五日」をひたすら唯一の楽しみに晴耕雨読のこんにちである。

いま日本中は、昨年からのコロナウイルス禍にあえぐ第三波の感染対策緊急事態宣言が四都府県に四月二十五日から五月十一日まで延長されたが、なんの

は、広々とした大海原と鯛の浦遊覧船で舟の周りに「大量の赤・黒大小の鯛の群れが餌に群がり、海が真つ黒になったこと」

「勇壮な誕生寺本堂と土産物店の賑やか売り子の声に誘われつい買って食べた鯛煎餅の味」など今でも強烈に記憶している程度であった。退職後数回観光で訪ね最近は一昨年七月半ば仲間七人と出かけたが、泳ぐ鯛は小さくなり観光客は少なく寂しい感が否めなかった。

〜残念至極候也〜

二、館山那古浜の課外居候生活  
一度目の転勤は昭和三十七年九月幕張から館山市を拠点に受け持ち区域は安房郡一円である。下宿は海沿いの那古浜の蔵屋敷、社宅はないので先輩が五、六人の中に潜り込む生活となり結果的には二年間その蔵屋敷生活となる。今は亡き大家さん(ご夫妻(仮名釜屋徳太郎・梅子夫

妻)には大変お世話になりました。なご迷惑をおかけしました。(失礼重々承知の上伏して御礼申し上げ候) ここは、前は海那小浜(鏡ヶ浦)、後ろは山古刹那古寺

(坂東三十三寺の結願寺)を背にする名勝地、まさに宮城県民謡

「大漁唄い込み」歌詞を地で行く土地とひと晩で感じいつてしまった。濃厚で酒好きないつもニコニコの大家さん、おおらかな奥様、週末と休日には決まって蔵前に筵を敷き皆車座となり「冷酒(甲子)コップ一杯・釣りたての鱸スズキ・イカの刺身・焼き鳥二本」で昔バナシに花が咲く、間もない時がすぎると、手拭い・はじ巻きに東北生まれ吾輩と先輩二、三から「前は海サヨ―後ろは山で・・・」と調子はずれの民謡を喰りながら憂さ晴らしをした日々の二年間は、流浪の人生で最高の時を過ごした。従ってこの頃は「郷土の歴史観」などゼロで論外の外であった。(漁師はいつもなぜ「はじ巻き」をするか、その意味を教えてください)

三、那古観音・地元檀家との出会い

晴天の日は週一ぐらい那古山の境内と坂道を駆け回り、終わればれば真下の「小倉食堂」で食事して帰る日課であったが、

何にちか繰り返ししているうちにいつも境内を掃除している地元のお寺の話を聞くうちに那古船形の元漁師の檀家さんと知り以後郷土史的な話題を聞かせて貰った。

(昭和二十八年五月記)

古老とは数回那古山下の食堂で食事を共にしたが、この出会が八月那古寺縁日の稚児行列に一回だけ参加したのが良き思い出となった。(余談)食事代は

「一ヶ月つけ・ある時払いの催促なし」なので当時の下宿人は、皆女将さんには大変お世話になり今があることに心から感謝している。

四、私の信条と郷土史観の

目覚め(私記に見るメモ)

物置から埃だらけの書類の中から取り出した何冊かの手帳と日記帳を懐かしくめく何冊かの五行日記の表紙裏に記している次の言葉書きが何度かでてくるが転勤時と新年の記入が多い。  
・「土地(人)に歴史ありー忠恕の心忘れること勿れ」

(予科練出身の教官昭和二十五

年十一月記)

・「郷に入つては郷に従え」ー  
(入郷而従郷、入俗而随俗・  
中国禅宗(五灯会元の句)  
・「原点回帰」を忘れること  
なかれ

このことは、個々別々の年に時折記入してありおそらく思い出した時のメモである。大兄諸氏には、どなたもご存知のとおり言わば渡る世間の処世術は人それぞれであるが、以下に記した尤もらしい歴史観はさておき、今になり振り返ってみると 三十才近くになって人との良好な関係なくしては仕事はうまく回らないことに気づき、以後私の人生の行動指針(信条)となったかと思う。

そして郷土史ゼロの私は時を経て歴史に目覚め、縁もゆかりもない土地に転勤し、その土地と人を知ることの大切さの手っ取り早い近道の一步は「一日一寺一神社巡り」からと心して時間をみつければ近くの寺社から出かけることにしました。

これが私の放浪のはじまりであります。このことは、転々流浪の旅で結果として、どの土地・

地域でも半年程で数か所の寺への近道を知り住職さんや神主さんとの縁ができ、その「寺社の由緒・檀家・村の総代の苦労ばなし等々」自然にその土地風土・人の成り立ち、生き様を覚えていただき仕事上私の極めて重要な生活パターンとなり、お蔭で各地方での仕事は特に二度目の房総安房郡での仕事はスムーズであったと感謝している。

五、祭りの力は無限」を知る。  
鎮守の祭りは「土地の歴史の縮図なり」と心得たり。現代のしがらみを外し「原点立ち返らせる神の力(原点回帰)」である。

市町村の行事特に村落の年一回めぐってくる「祭り年番」は大変な準備と人手不足に悩む。よそ者のわたしは、出来るだけ出かけて参加することを心掛けた。「祭り」は、地域大人子供を問わず参加する事に意義があり、地域の連帯・協調性ー団結力ー統率力等諸々助長する「生きた社会教育・学校教育の原点」がある。ぜひ一年一度巡り来る村の「鎮守の祭り」に参加

し、ふるさと意識の高揚を図ってほしいものである。

因みに後記した「二宮七年祭(昭和五十四年十一月)九神社十日間」「日枝神社・白間津のオマチ(大祭)(平成七年七月)」「重要無形文化財指定」また「第一回八千代ふるさと祭り(昭和五十四年八月八千代台駅前)」にたまたま参加する機会があったが、いずれの祭りも事故なく無事に終わり、市と実行委員会は安堵した。時に祭りの前後は、習志野高校が甲子園大会出場(昭和五十五年夏)なども重なり晴れやかな行事が読いて街と周辺はおおいに盛り上がったことが懐かしい思い出である。

思うに今年に残念なことに昨年同様コロナウイルス感染防止策で各神社の「祭り」は中止のところが多いと聞くが、知恵を絞りながらこれを乗り越えて貰いたいと思う日々である。

第二 房総半島の地名の由来

(簡記ー諸説ある)

房総半島は、次のとおり日本の歴史上政治・経済上重要な位置付けにあり、立地上特に古代

東海道時代(奈良朝期)は、朝廷と公家の保養地的荘園(荘・郷)であり、武士団が形成される院政期までには、「房総三国の中世期的な荘園は、上総国十五ヶ所・安房国七ヶ所・下総国三十ヶ所程度が確認され、その成立に大きな役割を果たしたのが「平忠常」の子孫で両総平氏と呼ばれる桓武天皇の一族である。

千葉氏一族が全国的に活躍する中世期(鎌倉時代-室町時代)における武士団からは、「喉から手が出るほどの肥沃な土地」であったに違いない。

(参考) 千葉県の歴史百話  
川名登氏著

(一) 「千葉と総」について  
千葉の地名は「多くの葉が繁茂する」意で草木が生い茂る原野で土地の繁栄を願っての地名との説が有力、平安後期、千葉郡の千葉郷を基礎にして皇室領の大荘園「千葉荘」が成立、この荘を本拠に房総平氏一族が千葉の苗字とし現代にいたっている。最も古くみえるのは「万葉

集巻二十」天平勝宝七年(755年)千葉郡出身の防人太田部足人の一首である。「千葉野の児手柏の含まれどあやにかなしみ置きて高来ぬ」また「古事記」

「日本書紀」には、応神天皇の国見の歌として「千葉の葛野のを見れば百千足る家庭も見ゆ国の秀も見ゆ」をのせている。

「千葉の」とは数多くの葉の意味で、葛の葉がよく繁茂するところから葛の枕詞として用いられた。(江戸時代前期の国学者契沖)

(二) 「総の国」と

「安房の国」とは  
上総・下総両国は、もと「総の国」として朝廷あら把握されていたが、奈良時代の養老二年(718年)上総から安房が独立

房総三国が成立する。国名は、「古語拾遺」には平安初期、忌部氏の祖天富命が阿波の齋部の一部を率いて東国へ大移動し麻を栽培して成功した肥沃な地が「総の国」で齋部の居住地を阿波の名をとり安房国と名付けた。

また「房」も「総」もともに花や実などが茎や枝にむらがりつき、垂れ下がるような状態を示す古語の「ふさ」にあてる字であるから房総三国は、麻や栗などの物産豊かな地かあるいは豊作を祈っての国名でその点では奇しくも千葉と同じ趣旨の命名であった。

(参考) 県史⑩千葉県の歴史  
石井進一 宇野俊一編

(三) 放浪の旅(寺社巡り)

転勤二度目を含むで  
感じた南房総

房総三国は、神社仏閣が思いのほか数多くある中で安房郡(安房国)は、奈良時代(大和朝廷)や平安時代に中央政権にまつわる古い寺社が多い、反面千葉氏にかかわる歴史的伝承は、また鎌倉時代以降の「頼朝伝・足跡」の風習やお寺の供養祭、神社の祭りなどは、今なお地元住民の生活に色濃く残っている。しかし「千葉氏」に直接関わる寺社はほんの一部に過ぎない中でも古文書」などは意外に少なく感じられたが、時の時代から

やむを得ないのか、今後の先生方の研究に期待したい。

小生勉強不足反省しきり  
参考) 千葉県の寺社数(総数は全国6位) 寺院3005(4位)・神社3189(6位)  
(令和2年12月末)

現在文化庁宗教統計調査)

(四) 房総ぶらり旅に推薦したい

寺社十(南房総放浪編のみ)

どこの土地にも有名無名を問わず、歴史の重さを背負っている寺社仏閣沢山ある。とかく素通りしがちな寺社がほとんどであるが、これまでの寺社巡りをとおして住職や宮司さんのはなしを拝聴すると、今なお歴史と伝統を背負って「郷・住民の為」に必死で継承に努力している寺社がほとんどで、行政上の組織的バックアップ体制の強化と更なる伝統文化の継承意識の向上が必至であると考える。

そこで次に載せた五つの寺社は、千葉県下数ある中で安房郡にも奈良時代から江戸時代前期まで千葉氏に関わる由緒ある寺社がある、前にも触れたが、会

員の皆さんには釈迦に説法、理屈抜きでは非現地を調査してほしいので老婆心ながら紹介します。(五行日記・メモ帳とは)

年代等順不同―独断と偏見)

○お寺 ご開帳日(本尊仏・宝物

拝見―講話なら平日時間

予約がよい)

・那古寺―真言宗智山派、開創行基養老元年(717年)本尊

先手観音菩薩、44代元正天

皇勅願、坂東三十三観音の結

願寺・頼朝堂宇を建立建久年

間(1190-99年)

里見氏の帰衣

・大福寺(崖観音)―真言宗智

山派、開創行基養老元年(71

7年)本尊、本尊十一面観音

菩薩

・笠森寺―天台宗、開創最澄

延暦3年(784年)・68代

後一条天皇勅願、本尊十一面

観音菩薩、「観音堂・61本

の四方懸造り国宝建築」

・安楽寺―天台宗宝亀元年(77

0-780年)

開基不思議法師・本尊虚空蔵菩薩、阿弥陀如来・丸一族

菩提寺―丸五郎俊信、頼朝巡検を案内―頼朝丸御厨に泊

・普門寺(正文寺)―日蓮宗

聖観世音菩薩 創建12世紀

真田氏頭領・真田源吾―

正木氏一族菩提寺(三浦道寸

正木邦時―時忠―頼忠―時通

の墓) 頼忠の娘「於萬之方・

養珠院―家康側室・紀伊―

頼宣・水戸―頼房の母」

○神社 祭り・縁日がよい

・鶴谷八幡(館山・頼朝―戦勝

祈願―例大祭9月)

創建平安時代初期上総国府(三

芳村)府中安房国総社・安西八

幡宮(康応2年代頃遷座・13

90年) 鶴谷八幡宮と改称

(昭和51年・1976年)

・洲崎明神(館山・例大祭8月

・安房国一宮―頼朝―戦勝

祈願) 創建 神武天皇年間

大同2年(807年)御手洗山

中にあり 主祭神 天比理

乃咩命―安房国一宮・頼朝

源氏再起祈願

・高家(タカベ)神社―祭神

盤鹿六雁命(高倍神)日本唯一

料理人の神―千倉・四条流

包丁式58代光孝天皇(5月10月11月)―包丁供養(包丁塚)

・日枝神社―祭神 大山昨命

創建 延喜元年(901年)―

前記に簡記 (千倉・白間津大

祭(オオマチ)祭り―約100

0年前から伝わる)4年に一度

50日間―本祭7月・3日間

―国重要無形文化財平成4年

3月11日

・賀茂神社―祭神 賀茂別雷命

神殿造営―和銅5年(712

年)・本殿創建天正2年(15

74年)―賀茂神社略縁起

(丸山・大火祭12月末・

八朔花踊り毎年8月初旬―

昭和38年5月4日県指定)

おわりに

千葉氏一族の歴史をたどると

き、鎌倉幕府開府に多大な功勞

と名をはせ、その功勞により房

総半島を中心に北は陸奥一帯、

南は薩摩にいたるまで全国二十

数か所の広大な所領を獲得し、

成立から滅亡まで、約500年

にわたって同一の地域を支配

し、地域の政治経済文化の発展

に大きく寄与してきた。特に同

一の所領を同一の武士団が五世紀以上も支配する例は、全国的にもきわめて珍しい。そして今

なお全国都道府県の中で唯一単

一武士団「千葉氏」の県名があ

り、その末裔「千葉さん」が全

国各地に約19万1000人(全

国性別順位91位)おり、各方面

で活躍していることは皆さんも

ご承知のとおりであるが、小田

原合戦(天正18年―1590

年)後北条氏と共に「千葉一族

滅亡」はいかにも残念でならな

い、千葉に「千葉幕府(時代)―

頼朝と並ぶ「千葉常胤公の墓」

などあったとしたらこの房総三

国の今は・・・と思うのは妄想

の域を出ないが、生産力のない

年寄りのひがみか・・・?

「千葉氏を語る会」会員諸兄の

皆さんは如何?また駄弁を零し

てしまった。ご容赦ください。

編集後記 編集子

大変遅くなりましたが、会報十二号をお届けします。今回号では、第七回総会を特集しました。今後とも会員皆様の御協力をお願い致します。